

## 受難の主日（枝の主日）

ルカ 23・1-49

2022.4.10

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高神父

今日、枝の主日、受難の主日。その同じ日の典礼の中でわたしたちが聞いた聖書は、ご自分の町である、そこにいつか救い主メシアが来られると待ち望まれていたエルサレムに、主イエス様が入城なさる、そのような場面でした。

人々は自分の服を、イエス様がお乗りになったろばの背に載せて、そしてイエス様が行かれる道に服を敷いて、イエス様を熱狂的に、枝を手にかざしながら「オザンナ」の叫びを叫び続けました。このようにして、イエス様はエルサレムにお入りになられます。けれども、そのエルサレムは既に日暮れ近くなっていて、その日イエス様はご自分の町エルサレムで何もなさらないまま過ぎて行きます。

そして、今日の典礼の中で、あのイエス様のエルサレム入城に続くように、イエス様の受難の場面が朗読されました。それを聞いたわたしたちの心はどのようなであったのでしょうか。わたしたちの心に深く刻み付けられるイエス様のご受難の様子、そこでのイエス様のみことばを聴いても、わたしたちの心が動かされないとすると、わたしたちはどのようなイエス様を信じてきたのでしょうか。

イエス様に付き従ってエルサレムに入ったイエス様の弟子たちは、そこで彼らが体験した、人々の心の移ろい易さ、そして、それは自分たちが生きているこの世における人と人との関わりの全てがああイエス様のエルサレムの場面で示されている、そのように弟子たちは感じたに違いありません。この弟子たちの心は、あの夜の湖で経験したような大きな動揺を感じずにはいられなかったことでしょう。彼らの心はイエス様を見失ったかのように、イエス様を「幽霊だ」とあの湖の薄暗がりの中で叫んだように、彼らが信じてここまで付き従って来たイエス様が彼らの前で、幻のようにあの十字架のお姿を示してくださいます。そのイエス様のお姿を直視することができない。とてもついて行けない。弟子たちはイエス様を十字架の上に見捨てて、みんな逃げ去ってしまいます。けれども、それはあの時の弟子たちだけではありません。わたしたちみんな、そのようなイエス様の後に本当について行こう、そう思って信仰してきました。

しかし、弟子たちの信仰がそうであったように、わたしたちの信仰も、イエス様のあの十字架に最後までつき従って行く、それほどまでには成熟していないかもしれません。

そのような弟子たちのところに復活されたイエス様は戻ってきてくださって、彼らの信仰の至らなさ、彼らのイエス様を見捨ててしまった裏切りも少しも非難されずに、弟子たちの真ん中に立ってください、復活の主は、「あなたがたに平和」、そのように言ってくださいます。「もう大丈夫。全ては神様のご計画の通りに成し遂げられた。安心しなさい」、そのようにイエス様は弟子たちに語り掛けてくださって、「あなたがたに平和」、そのようにおっしゃってくださいました。

けれども、「あなたがたに平和」と言われる復活の主は、弟子たちの信仰のありようをそのままにしておかれるわけではありません。「わたしの霊を受けなさい」、そう言われて、弟子たちの中に復活のいのちを吹き込んでくださる復活の主は、弟子たちをあのような無様とも思える、「イエス様につき従って行きます。どのようなことがあっても、あなたから離れることはありません。あなたを見棄てることはありません」、そのように言い張った弟子たちのところにもう一度来てくださって、彼らの信仰を根本から立て直してくださいます。

復活の主のいのちの息吹を受けた弟子たちのように、この聖なる三日間を始めるにあたって、改めて、このようなイエス様のいのちの息吹をこの身にいただいて、わたしたちが生きるこの信仰のいのちがもう一度イエス様によって固く立てられますように、新たな息吹を取り戻すことができますように、この聖なる三日間の典礼を共にしたいと思います。